

論文の内容の要旨

論文題目

Under Crescent and Full Moons: Contradiction and Coherence of Muslims in Beijing
1906-1913

(新月と満月の下で：北京のムスリムの矛盾と一貫性 1906-1913)

氏名 海野（山崎）典子

本研究は、清朝末期から中華民国初期の北京における、漢語を話すムスリム Chinese-speaking Muslims（中華人民共和国における回族にほぼ相当）の多様な自他認識とその歴史的意義を、彼らのアンビバレントなイスラーム実践のあり方から読み解こうとするものである。

漢語を話すムスリムに関する歴史学的研究、とりわけ近現代史研究には、主に二つの問題があった。第一に、ムスリム・エリート（アホンと呼ばれる宗教指導者、知識人、ジャーナリスト、教育家など）が残した宗教書や政治言説のみを分析することによって「敬虔」なムスリムの「愛国主義」的性格を強調する先行研究では、「愛国」「敬虔」ではないように思われるムスリムの行為や思想、及び日常生活における彼らの社会的・文化的活動や価値観は等閑視されてきた。だが、近年の人類学的研究やイスラーム研究の成果が示すように、「矛盾している（ように見える）が、（本人たちのなかでは）一貫している」(contradictory yet coherent)」、複雑なイスラーム実践のあり方に注目する必要があるだろう。第二の問題は、ムスリムのナショナリズムや宗教熱が高揚したとされる 1930、40 年代に研究が集中していることである。一方、清朝が崩壊し中華民国が成立した 20 世紀初頭の時期は、王寛（1848-1919）や張子文（1875-1966）をはじめとする北京のムスリム・エリートがイスラーム改革運動を推進し、中国イスラーム文化黄金期の基礎を作ったと高く評価されているにもかかわらず、漢語で書かれた史料の種類が少なく、またアクセスも容易ではないこともあってか、十分に研究されてきたとは言い難い。

しかしながら、20 世紀初頭の時期は、北京のムスリム・エリートが中心となって、定期刊行物や歴史書の刊行、非ムスリム・外国人・新政府との関係構築といった課題に取り組むなかで、漢語を話すムスリムは「民族」か「宗教」集団か、イスラームを新時代にいかにして適応させていくべきか、19 世紀後半のムスリム反乱で「反逆者」と見なされたムスリムの地位をいかに回復すべきか、新疆のテュルク系ムスリムといかに団結すべきか、非ムスリムといかに共存していくべきかなど、今日まで続く議論を本格的に始めた重要な時期である。そこで、本研究は、①「愛国」や「敬虔」に必ずしも集約されない、日常生活における彼らのさまざまなイスラーム実践——具体的には、当時のムスリムにとって大きな関心事項であった、教育、経済、身だしなみ、食習慣、民間伝承と移動の記憶の問題——を論じることによって、②中国イスラーム史研究における空白期間である、20 世紀初頭の時期を埋めることを目指した。

本研究で使用する史料は、第一に、漢語を話すムスリムの雑誌・新聞・書籍である（一部はアラビア語）。また、当時の中国国内の新聞や雑誌におけるムスリム関連の記事、中国・台湾の档案資料も扱う。さらに、現地のモスクに保存されている文献・碑文や、20 世紀初頭に活躍した「改革派」アホンのご子息が保管されている民間所蔵資料も用いる。第二に、ロシア領内で刊行され、中央アジアで広く読まれていたテュルク諸語の新聞や雑誌である（一部はロシア語）。こうしたテュルク語史料の有用性は、従来の中国イスラーム史研究では看過されてきたが、当時の中国ムスリム社会の状況や「イスラーム世界」における彼らの位置づけを知るうえで多くの情報を与えてくれる。さらに、補完的に利用すべき史料としては、まず、漢語を話すムスリムに対して布教を行っていた欧米キリスト教宣教師や、東アジアのイスラームに学問的関心を抱いていた欧米の東洋学者による記録、及び彼らが現地で収集した資料群が挙げられる。次に、中国のムスリムを対象に「回教工作」を推進していた日本の軍部やアジア主義者の記録にも、漢語を話すムスリムに関する豊富な記述がある。

これらの新しい史料を活用して、本研究は、さまざまな「矛盾」を抱えつつも一貫して「イスラーム的」であろうとするムスリムの姿を、鮮明に描き出すことを試みた。

本研究は序論、本論、結論、参考文献表によって構成される、英語論文である。

第 1 章 “**Locating Beijing Muslims in a Historical Context**” では、ムスリム・メディアの嚆矢とされる『正宗愛国報』が創刊され、北京の牛街モスクのアホンであった王寛がマッカ巡礼の旅に出て当時の中東のイスラーム改革運動に衝撃を受けた 1906 年から、同紙が廃刊処分に至る 1913 年までの時期を一時代として概観するとともに、清末民初のムスリム・メディアの特徴を整理した。その際、本研究の主要史料の一つである、1909 年に中国を旅したロシア出身のタタール人ムスリムである、アブデュルレシト・イブラヒム Abdürreşid İbrahim のオスマン語ユーラシア旅行記『イスラーム世界』‘*Âlem-i İslâm ve Japonya’da İntişâr-ı İslâmiyet*’を用いて、漢語史料には描かれていない北京ムスリム社会の諸相を描いた。また、第二次世界大戦中に推進された日本のイスラーム工作の協力者であったとされるイブラヒムの記述や、日本の軍人が残した書簡を分析することによって、すでに 1900、10 年代には日本のアジア主義者や軍部が中国ムスリムへの接触を試みていたことを明らかにした。

第2章 “*Negotiating Minzu and Zongjiao*” は、nation の日本語訳である「民族」*minzoku* 概念の漢語訳であり、清末中国に紹介された「民族」*minzu* という新しい概念を用いてムスリム・エリートが展開した、「民族」「宗教」に関する議論や「五族共和」への対応を分析した。雑誌『醒回篇』を東京で発行した在日ムスリム留学生や『正宗愛国報』代表の丁宝臣をはじめ、多くのムスリム・エリートたちは、清朝や民国政府の見解に従って、漢語を話すムスリムは「回」ではなく「漢」であると主張した。だが、彼らはときに「漢」に対する「回」の優位性を表現することもあった。一方、王寛は他のムスリム・エリートの批判を受けながらも、本来は新疆のテュルク系ムスリムを意味していた「五族」のなかの「回族」代表として中華民国の辺疆政策に関与した。とは言え、王寛は、「回」が「民族」であるとは名言しなかった。つまり、回「漢」関係、及び「民族」概念に対するムスリム・エリートの認識や態度は曖昧で、流動的であった。

第3章から第6章は、従来の研究ではほとんど扱われてこなかった、ムスリムの日常生活に光を当てた。

第3章 “*Educational Reform, Reformists and Conservatives, and the Ottoman and Russian Empires*” では、中東から帰国後に王寛らが推進した、新時代に適応できる近代的な科学知識や実学を教授するという教育改革案について、以下の3点を指摘した。第一に、ロシア帝国のジャディード知識人、及び中国との交易関係樹立を希望するオスマン帝国スルタンのアブデュルハミト2世が派遣したムスリムは、中国ムスリムの教育改革において重要な役割を果たした。第二に、王寛や楊敬修の教育改革案は、優秀な学生に対する報奨金の受給や工業学校の設定といった金銭にかかわる内容が多かったため、伝統的なイスラーム教育を維持しようとする上の世代のアホンたちの反発を招いた。しかし、王寛らは私利私欲のためではなく、深刻な貧困問題を抱えていたムスリム社会の経済状況を改善するという目標を抱いて、このような教育改革案を提唱したのである。第三に、「改革派」と言われる人々のなかにも、「瀕死の病人」と揶揄されるほど弱体化していたオスマン帝国の威光にすぎることによせず、王寛とオスマン帝国の接近を快く思わない人々がいた。このことは、「改革派」が一枚岩ではなかったことを示している。

第4章 “*Cutting off the Queue for Faith, Preserving the Queue for Face*” は、辛亥革命前後のムスリムの辮髪切除運動を取り上げた。反清・排満感情や「愛国」的動機によって推進されたとされる非ムスリムの辮髪切除運動とは対照的に、北京のムスリム・エリートたちは、預言者ムハンマドが中途半端に剃り残した髪形を嫌っていた、辮髪はイスラームで忌避される豚の尾に似ているといった宗教的理由を掲げて、辮髪を剪った。しかし、天津の事例が示すように、剪辮は「国粹」に反するという理由から辮髪維持を唱える者もいた。ある「改革派」のアホンは、辮髪はイスラームの教えに反していると個人的には考えながらも、「頑固」で「保守的」な上の世代のムスリムの批判を躲し自身の「体裁」を保つため、ムスリム同士の争いを防ぐために、辮髪切除を見送った。これらのことから、「愛国」が必ずしもムスリムの行動理由の全てではなかったこと、また、「改革派」「保守派」というカテゴリーが流動的であったこと、世代間格差こそがムスリム社会を分断していたことがわかる。

短期間に起こった出来事を論じた第3、4章とは異なり、第5、6章は20世紀初頭の北京を中

心としつつも、中国のムスリムが長い間抱えてきた問題を考察する。

第5章 “**Legends, Migration Memories, and Bloodline**” は、預言者ムハンマドの教友であるワッカースによって中国にイスラームがもたらされたという、17世紀頃に編纂され清末民初の北京でも広く知られていた民間伝承（『回回原来』『西来宗譜』）の歴史的役割について、以下2点を明らかにした。第一に、これらの民間伝承は中国各地のムスリム社会において、正確な「歴史」と信じられてきた。20世紀初頭に新疆で活躍したテュルク系ムスリムの歴史家ムッラー・ムーサー・サイラーミー *Mullā Mūsā Sayrāmī* もまた、この民間伝承を引用した。第二に、「西域」出身者の子孫であることは、ワッカースの末裔とされる王寛の事例や、1930年代の「回教民族」説が外来ムスリムを祖先とすることをムスリムの「民族」性の根拠の一つとしたことが物語るように、多くのムスリムにとって誇りであった。たとえ伝承の内容自体が「イスラーム的」「史実」でなかったとしても、祖先が「西域」から来たという彼らの「西来」意識は、ムスリムとしてのプライドや一体感を維持するうえで一定の役割を果たしてきたと推察される。

第6章 “**Ḥalāl Problems and the Qingzhen Consciousness**” は食習慣を扱う。漢語を話すムスリムはイスラーム的に合法とされる「清真」（ハラール）料理を食べるが、清末民初のムスリム定期刊行物では、ハラール問題、すなわちムスリムの豚タブーを揶揄する人々や偽のハラール食材を売る業者との衝突に象徴される、食習慣の違いや無理解に起因する諸問題が繰り返し報道された。これらの問題を報じた『正宗愛国報』は、通常は漢語を話すムスリムが「民族」であることを否定し、「清真教人」「教民」といった呼称を用いていた。だが、食をめぐる問題に関しては「回教人」「漢教人」（または「仏教人」という名称を使用して「漢」「回」の違いを強調し、「回教人」の衛生観念の高さを主張した。また、ハラール問題発生時、アホンの一部は「漢教人」に偽ハラールの看板を取り外すよう働きかけるとともに、イスラーム全体の「名誉」を守るために、ムスリムが暴力に訴えることを戒めた。だが、彼らの努力もむなしく、ハラール問題は現在に至るまで幾度となく繰り返されている。

以上本論6章の議論を踏まえた結論は、次のとおりである。20世紀初頭の北京におけるムスリムの自他認識は流動的であり（第2章）、彼らはときにイスラームの教えに反するような「矛盾」した行動をとることもあった。たとえば、教育改革を口実に経済的利益を追求する（第3章）、剪髪反対派の反発を躲すために反イスラーム的とされる辮髪を維持する（第4章）、「史実」ではない民間伝承を「歴史」として解釈する（第5章）、ハラール問題を起こした非ムスリムをアホンの警告に背いて襲撃する（第6章）などである。しかし、こうしたアンビバレントなイスラーム実践は、ムスリム社会の安定と存続、ムスリムとしての「体裁」「名誉」や「誇り」の維持といった、彼らにとっては一貫した理由によって行われていた。換言すれば、一見「非敬虔」に思われる行為こそが、彼らの「敬虔さ」を支えていたのだと言える。もちろん、このように「矛盾」と「一貫性」のあいだで揺れ動くのは、中国のムスリムに限定された話ではない。人間のアンビバレントな日常実践に目を向けるによって、歴史記述はより豊かになるはずである。